モラロジー論

——アシニアムクラブ講演（1981年3月17日）——

ロバートE.ボール

I

このようなお集り[1]に対しまして、モラロジーという演題で大胆にもお話しするには私は非常に不適格である、と内心忸怩（じくじ）たるものがあります。と申しますのも、皆様方[2]はほとんどが科学者であり学者であり、私がこれから取り扱いますことは自らを科学であると標榜するものでありますが、私自身は決して科学を云々する資格があるとは思っていないからです。私の専門は、演題からかけはなれた狭い法律の分野にあるからです。さらにこの話は本当なら、私たちの友人であるラワリーズ博士にしていただくべきものです。ラワリーズ博士は、私などよりずっと専門家であり、ある意味では私は彼の縄張りを荒しているのです。しかしこうなったのも、ラワリーズ博士と皆さんに責任があります。というのは、1979年の12月に私がここでお話をしたのが縁で、ラワリーズ博士が私にモラロジーに興味を持たせ、さらにそれについて本を書くようにすすめて下さったからです。また、西洋ではこれまで出版さ

れたことのない資料をたくさん提供してくれたり、提供の手はずを整えてくれたり、さらに日本におけるその科学の説明の出来る人たちを紹介して下さいました。そこで過去一年有余、モラロジーは私が共に生きてきた1つの主題になっています。

モラロジーは、道徳の科学 (the science of morals) であると称していますが、それは日本から見た孔子の世界観に基づいています。その教説の概略を述べます前に、それがどのようにして起こってきたのか、ここで説明しなければなりません。その創建者は日本人で、廣池千九郎といい、1866年から1938年まで生存していた人で、幕府時代という中世的な生活から日本を近代世界にもっていった人々の中の1人でした。廣池はその生涯を中国・日本の古典と日本史専攻の教師から始めました。しかしまもなく歴史を専門職とすることになりましたが、それは余り割のよい職ではありませんでした。廣池は次に、官撰の百科事典『古事類苑』の一編集者となり、12年間、主として文学・法律・政治・医学・宗教の部門を担当しました。これは中国の法律に廣池が関心をいだく契機となり、日本のある専門学校の法学教授となり、中国の法律と、外国人の眼にはかなり奇妙に映りますが、神道の中心である伊勢神宮の歴史についての講義を担当しました。彼は中国古代親族法に関する学位論文を提出し、1912年東京帝国大学から法学博士号を受けました。時を同じうして起こった大患は、一種の宗教的覚醒をもたらし、それによって廣池は自分の職業としての学者の経歴を断念し、学問の発展と真理の擁護に献身することになりました。彼は神道のある派の信徒になりましたが、まもなく導入しようとして果せなかった諸改革案の故に、そこから追い出されることになりました。きびしい困難な境遇の中で、廣池はその後『新科学としてのモラロジーを確立するための最初の試みとしての道徳科学の論文』と題する3,341ページにのぼる浩瀚な著書を書きあげました。これは1928年に刊行され、その結果、研究所とすぐ後にできた専門学校から成る1つの教育団体を形成するに至りました。これは1938年の廣池の死まで発展していきました。長男千英が後を継ぎましたが、日本の第二次大戦への参戦によってほとんど抹

殺されんばかりになりました。というのはその教説は反帝国主義的であり、日本の軍事的な冒険を容認していなかったためです。研究所は戦争の終結とともに復活し、それ以来、着実に力をつけてきました。現在千九郎の孫である廣池千太郎の主宰の下に、研究所、1つの大学と2つの高校を経営しています。約600の支部及び地方事務所をもち、また韓国、ブラジル、ホノルル、カリフォルニアにセンターをもっています。研究所は約6万人の個人会員と6千社以上の法人会員を擁しています。法人会員のうちの多くは大きな産業会社で、モラロジーの原理を採り入れて成功し、その結果非常に充分な財政的支援を研究所に提供しています。ラワリーズ博士は私にモラロジアンは選挙の折、25万票を動員できると話してくれました。

それではモラロジーというのは一体何でしょうか。皆様方のような専門家を前にして、モラロジーが、皆様の大多数がお考えのような種類の厳密科学であるなどと主張するつもりはありません。モラロジーが1つの科学であると主張する所以は、つぎのように述べられています。すなわち「最高道徳は因果律という確固たる基礎に立って精神的安定と確信を追求するものであるから、それは科学的研究法をとっているといえよう」。それはその基礎としてある命題を受け入れていきますが、それらの命題は霊感を受けたとみなされている諸聖人によって体系づけられたものであり、その故に、それらの教説は自明であり、議論を超えたものなのです。これらから調和のとれた人生を送るための諸規則を導き出します。これは、単に実践する人々の人生ばかりでなく、その遠い子孫にまで成功をもたらす、とモラロジーでは主張しています。モラロジーは来世については何も語っていません。宗教的な側面はもっていますが、宗教ではありません。モラロジーは人生の実践哲学の一種ですが、究極的な哲学上の問題は取り扱ってはいません。政治的な意味あいもありますが、政治体系ではありません。

II

モラロジーを理解するためには、古代中国の知的見解、つまり孔子によっ

て例証を与えられ、また発展させられましたが、孔子その人よりもはるかに古いところのものにまで遡っていかなければならないと思います。この思想は日本に採り入れられそこでさらに発展しました。それが廣池の教説の底流をなしているように思われます。もっとも廣池は、外部世界の学問、特に西欧とインドの学問を参照することによって、それを広め現代化しています。

初心者としてお話ししますけれども、古代中国の宇宙像は私にはつぎのように見えます。元始に神がいました。神の実在と特質は、あらゆる人間的理解を超越したものでありますが、部分的には慈悲であるとか、キリスト教徒なら愛とでもいうようなものとして理解することができます。神はあらゆる範疇を超越しており、究極的なるもの、不変のものです。神は天と地を創造しました。「天」は霊の超感覚的な世界を意味します。それは宇宙の諸法則すなわち物理学の法則のように物質創造を支配する諸法則と精神的あるいは道徳上の法則の２つを含むものです。そこで自然の法則は神の法則と見なされます。「地」とは物質的宇宙を意味していますが、それは人間とそのあらゆる機能・傾向・特徴を含んでいます。天は創造的要素で、そこで起こることは、地で起こることよりももっと高い程度の実在性があります。それは進化論的性格をもっており、動と不動の相互作用によって、物事の一般的な流れ、すなわち道（Ta'o）を方向づけます。天における運動のパターンは地における事柄に反映します。それは背後で行なわれている真の出来事の投ずる影だけしか人類は見ることができないというプラトンの洞穴説のようなものです。２つの偉大な力は陰と陽で、それらは補完的で相互に作用しあいます。積極的な原理は陽で、創造的、動的、男性的、かつ光明的と考えられています。消極的な原理は陰で、生殖的、受容的、保護的、女性的かつ暗黒的であると考えられています。

少なくとも紀元前12世紀までに、中国人は父と母、３人の息子と３人の娘からなる理論上の家族として、天上の力を体系化していました。もっともこれらは人間とか神・女神として考えられているのではなくて、それらの特徴を反映している心像をもった進化論的発展の根元的なもの、あるいは性向と

して理解されています。父と３人の息子という４つの陽の要素は、乾（Ch'i-en）で創造的なもの、強きものであり、その象は天です。つぎに震（Chên）は長男で喚起するもの、運動、生命エネルギーを表わしていましてその象は雷です。つぎに坎（K'an）は〔次男〕底知れぬもので危険、神秘的な深さ、悪に最も近い道を表わし、その象は水です。おそらくそれは原始時代の大洋であるといってもよいでしょう。〔末の息子〕艮（Kên）は静かに保ち、休養、不動を表わしその象は山です。４つの陰の要素は母親と３人の娘です。坤（K'un）は受容するもので、生殖的、献身的、従順でその象は地です。長女の巽（Sun）は優しく浸透するもので、潜行性のものであり、その象は風と木です。離（Li）は〔真中の娘〕粘着するもの、光を与えるもので、知性をあらわし、その象は火です。兌（Tui）〔末娘〕は喜ばしきもので、その象は湖です。これらすべてのものは、時間の移り行く中で、年の一巡、季節の時点の守護者のような２次的属性を与えられてきました。例えば兌は喜びですがまた性的で危険なものでもあります。そして口と舌とに関係しており、そこで言論、直観的洞察と関係し、また金属、そこで武器と軍事とに関係しています。それは西と秋を支配しますので死と来世とも関連しています。ギリシャの神々の中で兌に相当するものは――もっとも兌は神ではなく一つの傾向なのですが――アフロディテ〔訳注、愛と美の女神でローマ神話のヴィーナスに当たる〕、アテーネー〔訳注、知恵・学芸・工芸・戦争の女神でローマ神話のミネルヴァに当たる〕、ペルセポネー〔訳注、冥界の王 Hades の妃〕をまとめたようなものといってもよいでしょう。もっともアテーネーにちょうど対応するのは２番目の娘の離です。というのは離は学問と推論する知性を象徴するものですから。これらの諸々の天上の傾向が相互作用をして、地上のすべての出来事を招来しますが、それらはいずれも決定的なところまでに至りません。天上の諸傾向は地上にあうように修正され、また地上の行為がそれに調節されるからです。すべてのものは絶え間ない流動状態にあり、積極的な前進は常に消極的な反動に会い、またその逆のこともおこります。しかしその結果は、ヒンズー教のいう静的な循環性ではなく、未知のゴール

への進歩なのです。

この背景にはいつも慈悲深い神御自身がいます。神は生ける人格で、直接祈りの際に呼びかけることができます。そこで私たちが下から諸々の傾向に適応するように、神は上から諸傾向を左右します。さらに神は人間の中に受肉し権化となりえます。神の権化は、超絶的な神と同一視されますが、究極的な神は神のあらゆる創造物の中に内在する要素として考えられています。

しかし廣池の根本的な思想の中にある日本的要素を私たちは忘れてはなりません。彼は仏教徒として育てられましたが、日本においては、私の理解するところでは、仏教と神道は密接な関係にあり、廣池は神道から大きな影響を受けています。この主要な特色は先祖に対する崇敬、特に日本皇室に対する崇拝です。皇統は神話で太陽の女神と同一視されている女神天照大神にその端を発していると想像されています。廣池が天祖を神格を賦与された歴史上の人物であると考えていたかどうか、私はこれまでのところ分りませんが、そうらしいと思っています。日本人の目にとっては、それは本当のところ問題ではないように私には思われます。神道の信仰では天祖は至高至徳の人格であるので、その子孫の全系列に徳と永続性を授けたのです。そして日本の天皇は人間以上のものとして看做されています。廣池が深い知識をもっている伊勢神宮は、皇室崇拝の中心です。この崇拝は廣池の著作に大きな影響を与えています。

もっともモラロジーがこの体系の解説であるというふうに皆様に考えていただきたくはありません。いくらか詳しくなりすぎた嫌いがありますが、それは廣池の根本的な考え方、特に神的なものに対する彼の考えの多くに底流としてあるからです。究極的なものに対する観念なしには、どんな道徳価値体系も編み出すことはできません。

そういうわけで、廣池の思想の枠組みは古典的中国・日本文化という非常に安定したものであります。観念の奔放な冒険はありません。究極的なものに疑問を示すということもありません。それは創造の型はすでに確定してお

り、残っているすべてといえば、ただ進化の流れに自己を調和してまかせることであるからです。科学上の諸発見は苦もなくこの枠組みの中にはめこまれています。全く奇妙なことに、現在の原子物理学者の結論は数千年前に中国で予想されていたように思われます。廣池の著作の目標は、遵守すると人間の幸福が確保されるところの行為の原則を定めることです。道徳的に善なる行為は自動的に原因結果として物質的利益を生み出すということを主張されていますが、その意味において、その方法は科学的です。この命題の有効性を疑うこともできましょうが、批判する前にその体系を眺めてみましょう。

Ⅲ

廣池は彼が最高道徳と呼んでいるところの観念から始めています。これを廣池は世界の偉大な聖人たちの教説から集めてきたものです。聖人はいずれも皆神から霊感を受け、前に述べましたような天上の支配的傾向に対する洞察力を与えられています。利他的である最高道徳と、伝統的あるいは因襲的と呼ばれているあらゆる従前の道徳体系とを廣池は峻別しています。これらの因襲的道徳はすべて、利己心によってある程度まで汚染されており、利己的な人間が仲間と平和に暮していくためにしなければならない妥協を表わしています。そういうわけで、中世日本の武士階級の規準である武士道のような騎士道の規範も非難されています。『道徳科学の論文』の中に約24の欠陥のある道徳を取り扱った箇所〔第10章〕があります。これらの箇所はまだ日本語から英訳されていませんので[3]、私はただその見出ししか見ておりません。それらの例としては、正義的道徳、義理的道徳、自尊的道徳、礼式的道徳及び交際的道徳、妥協的道徳、修養的道徳があげられます。

しかしながら、偉大な聖人方の最高道徳はもっと高い水準にあると言われています。廣池があげている聖人は５人いますが、そのうちの４人については異議を申し立てるようなことは少ししかありません。その４人はイエス・キリスト、孔子、釈迦、それにソクラテスです。後者の教説はプラトンの著作を通してのみわかるのですから、ソクラテス＝プラトンは一個の合成聖人

であると言ってもよいかも知れません。第5人目は日本皇室の女の祖先である天照大神ですが、日本人でないものにとっては、彼女が現実にいた人なのか、それとも神話上の存在なのか、とにかく若干分りにくいところがあります。天照大神は最高道徳の諸原理を遵守したといわれていますけれども、その実際の教説についての口承あるいは書かれた記録はないように思われます。韓国においては、私の理解するところでは、天祖の代りにその国の聖人を当てています[4]。実際のところ、最高道徳を実行した人は誰でも、もっともそれは最大の困難をもってしてはじめて達成できることだと言われていますが、聖人としての資格があります。しかし、廣池は私が申しました5人に限定しています。廣池はマホメットをはっきり除外しています。モーセやファラオ・アクナトン（古代エジプトの王アメンホテップ四世—1357？B. C.）のような他の可能な候補者が考えられましょう。諸聖人の神学は無視してその道徳上の教説に集中することによって、廣池は首尾一貫した教説の本体を発見していますが、それはすべて本質上「神をまず最初に愛し、そして貴方の隣人を貴方と同じように愛しなさい」というキリスト教の公式に還元できます。ただそれよりすこしばかりくわしくて、6つの原理になって表現されています。それらは次の通りです。

1．自我没却。これはこの世の繁栄に背を向けて禁欲するようにという呼びかけではなく、何事をなすにせよ、利己的な動機でしてはならないということです。

2．神の慈悲に対する信仰。それは神が宇宙の法則を創ったことにうかがえます。神は善であり、したがって神の創りたまえるものも善です。

3．権利より義務を先行すること。義務を最初に果さない人には権利が生じません。

4．人心開発・救済。これには何ら秘教的あるいは神秘的な意味はなくて、出来るだけ多くの人々に安心、平和、幸福を与えることによって、個人の幸福が達成されるという原理です。

5．道徳的因果律の受容。すなわち、行為をなす場合、道徳性の有無で、

その行為のもたらす物質的結果が異なってくるということです。これはヒンズー教や仏教の業（カルマ）の教説に似たところがありますが、業説のように行為者自身の生命の流れが流転するというよりは、むしろ行為者とその子孫の人生の行路にあらわれてくるということです。廣池はダーウィンの進化論に言及して非常に興味深いやり方でこれを強化しています。つまり、生存競争において、道徳が高ければ高いほど生存する価値が高くなるということです。最高道徳に忠実であることは、個人とその子孫の両方に幸福をもたらし、人類の安寧を増強します。

6．最後に、伝統（オーソリノン）。これは説明するのに最もむづかしいものです。それについてすこしばかり時間をかけてみましょう。

勿論、伝統（オーソリノン）は、まっすぐな糸をあらわすギリシャ語であります。本質的にはこの教説は、人は恩人の家に忠誠と尊敬をしなければならないということです。当座の間の家系を代表する個人に対するというよりはむしろ、抽象的な家系自体に忠誠と尊敬を捧げるということです。別の言い方をしますと、権威ある家系という形をとった進化の流れに対する忠誠であると言えましょう。それは個人に影響を与え、また有徳なる先行者によって創められた良き道徳的因果律を未来の調和した発展に向かうようにさせるのに助けとなるものであります。このことは色々な種類の伝統を論ずるとき、すこしばかり明確になるでしょう。3つの主要な伝統（オーソリノン）と、無数の準伝統があります。

主要な伝統は次の通りです。

1．国家伝統。これは君主制の国家では王、女王、あるいは天皇、共和制の国家ではその時の大統領のような首長の地位の系列によって代表される国家（the State）です[5]。王あるいは大統領は国家の精神的体現者です。しかしこの理論は共和国よりも君主制の国でもっとうまくあてはまります。廣池は神話時代の過去から連綿とつづく血統をもった日本皇室に特別の強調を置いていますが、イギリスの君主制についても特に敬意を表しています。廣池はこれらの系列を絶対必要な糸筋で、それなしに

は国家は分裂してしまうだろうと考えていました。

2．精神伝統。これはまた教えの伝統とも呼ばれています。これは一種の二重になっている系列です。というのは、五大聖人とその教説の後継者の系統が１つで、特定の宗教に対する信仰を持っている人々にとってのもう１つの、――自由意志によって選択した系列は、開祖(必ずしもすでに述べた聖人のうちの１人でないかも知れない）――系列であり、またその教義を継承したが、必ずしも普通の宗教指導者とか宗教の教師ではないところの後継者の系統が考えられるからです。ある特定の宗教に対する帰依は重要なものではない、と強く廣池は述べています。彼の見解によりますと、組織された宗教は神を独占するものではなく、また往々にして職業根性に毒されているからです。職業根性は初めにあった霊感の光を暗くしてしまうのです。すべての人は神を信じなければなりません。そしてその諸伝統を尊重しなければなりません。たしかに廣池は神を信じ、伝統を尊重せざるものは、人間以下の亜人であるときっぱり断言しています。というのは、神に対する信仰は人間を動物から区別するものであるからです。すべての人は自分のやり方で１日２回、神を礼拝しなければなりません。祈りを捧げ、罪の許しを乞い、聖人の教説を、なるべくなら原典で研究しなければなりません。もちろん廣池自身の著作もその中に入っています。信仰といっても、僧侶の介入に頼る必要はありません。もっとも１つの宗教団体の成員になることを妨げるわけではありません。しかし廣池にはいくらか反聖職的偏見のようなものがありますが、それは疑いもなく、一時期廣池が属していた神道宗派との不幸な体験に起因しています。

3．家の伝統。これは、私たちの両親において頂点に達している祖先の系列です。私たちの肉体的特質、生活の仕方について手ほどきされること、私たちの教養の多くのもの、物質的繁栄のおそらく大部分、私たちの帰属意識をそこから得ています。家族から切り離されることは、全く手痛い損失です。系列は私たちを通して表われてくるのであって、従って全く進化的です。未来に望ましい影響を与えようとすれば、私たちは過去を尊重しなければなりません。さらに家族は国家の核であり、したがって国家伝統と関連しています。

重要さは劣りますが、それでも意義深いのが準伝統です。準伝統とは、どんな種類であれ、実際的な援助を私たちにしてくれた恩人であると述べることができます。そういう人々は、祖父母――両親――自分という直接的系列からはずれた目上の家族（たとえば兄)、教師や技芸の先生、高級官吏、陸海軍の将校、一流企業の経営者、地方行政官、工場所有者、会社社長などですが、これで全部あげたわけではありません。原理となるのは、受けた恩義に対する報恩としての忠誠であり尊敬であるのです。しかしここでの尊敬は別に絶対的とか無条件とかいうほどのものではほとんどありえません。おそらく間違っているかも知れませんが、準伝統というのは準尊敬の資格のあるものではないかと、これにこじつけの注解をつけてみました。権威に対する日本人の尊敬心を完全に受け入れることはむづかしいのですけれども、すくなくとも私たちイギリス人は、私たちに対する正しい行為は忠誠という形でお返しがもらえる資格があることを認めることはできます。例えば雇用者に対する「当局対自分たち」という態度は、お互いを認めて、協力していくという紐帯によって、とってかわる必要があります。

これらが最高道徳の主要原理です。そのような道徳の実践は次の５つの形で慈悲を発動するものとして要約できます。

1．慈悲的正義――慈悲のタイミングとか質を知的に計量すること。

2．他者を助ける慈悲的な自己犠牲。禁欲主義の形としての、過度の、あるいは無理じいの自己犠牲は奨励されていません。

3．他者の過失を慈悲をもって償うこと。そのような過失は、暴露や不平の的にすべきではなく、自分自身の努力によって補償すべきです。

4．慈悲をもてる人格の自己完成。心の平静さは、公平無私な自分自身の品性の完成によってえられ、究極的には人類の福祉の増進につながっています。

5．慈悲心をもってする批判と自己反省。これは自己批判と、必要な場合には他者に対する批判も含むものですが、他者に関する場合は、自己主張的なエゴイズムは除外されなければなりません。批判は慈悲をもってしなければなりません。

廣池はこれらの教えがこまごまと適用される場合、時代によって、国によって、必然的に変わらなければならないことを認めています。道徳の規則や、従って道徳的因果の法則の適用は、他のすべてのものと同様進化します。益々増大する複雑さと結び合って、意識や洞察が高まり、必然的に新しい道徳問題を生み出していると言えましょう。

Ⅳ

廣池の学問は広大でしたけれども、廣池は彼自身の時代と場所に大きく影響を受けた人物でもありました。初めて接するときは私たちが受け入れることが困難であるような姿勢を廣池はとっています。全然平等主義的ではありません。人類の大部分は儒教的君子あるいはすぐれた人士のための体系である最高道徳を理解することはできないと廣池は考えています。誰でも最高道徳の境地を熱望することができますが、大多数はそうしません。彼にとっては、階級構造は神聖に定められたものであり、先天的及び後天的影響の結果という人類のさまざまな運命に起因するものです。しかし廣池は階級間の移動を受け入れています。進歩は卓越した知力を持った個人の仕事の結果です。廣池は「すべて大善事は輿論の力若くは尋常人多数の力にて出来るものではないので御座ります」と述べています。老齢、富、高位はすべて仮定上徳のしるしと考えられています。もっともこの仮定は絶対的なものではありません。トップにいる人々は先祖によって貯えられた徳で生活しているかも知れません。それを彼らは食いつぶしているところです。彼ら自身は無価値のもので、破滅に至る途中かも知れません。それにもかかわらず、廣池の描く世界は基本的には貴族主義的であり、廣池は平等主義を一種のユートピア的誤りであると一笑に付しています。現代の悪弊として、デモクラティ

ズム、社会主義、感情主義、マターナリズム（愚かな溺愛によって子供や下のものを甘やかして駄目にしてしまうこと）、便宜主義、および物質主義を挙げています。

廣池の考えている理想社会は、御身自らが聖人である天皇が長である国家で、天皇は有徳なる貴族と慈悲深い雇用者によって補翼されており、かつ彼らの努力は、従順にして恭順な労働者階級によって容認されている、といったものです。それにもかかわらず、高い地位にいる人は、彼の下位にいる人々の総意を尊重し、それに従う必要がありますので、限定された種類のデモクラシーと考えられます。それを廣池は貴族民主主義（“aristo-democracy”）と呼んでいます。したがって政治において、啓発された上位の者の洞察力と大衆の意志との間に均衡がなければなりません。これは現在私たちイギリス人が持っている種類の憲法なのですが、廣池の考えているのはイギリス憲法よりもっと貴族的要素の方にかたむいたものです。これはアリストテレスが国家（polity）と呼んでいるものに近いように思われます。その国家では全体としての共同体の利益のために、市民の大部分によって支配がなされます。そこでこれは扇動行為とかデモクラティズムとかその他の、無資産者や単なる投票する大多数の者たちの利益のための支配とは反対のものです。

家庭生活において、妻は夫に従順でなければなりません。もっとも夫と妻はお互いの人格を尊敬しなければなりません。子供は両親を敬い、服従しなければなりません。また下の者は上の者、たとえば兄たちを敬わなければなりません。職業生活においては、上の人に服従し尊敬しなければなりません。また上の人はそのお返しとして下位の者の全体的な望みに耳をかたむけ、それに従う義務があります。教育制度は、道徳心を植え付けることを第一義とするように、改正する必要があります。事実に関する学習は大切ですが、精神的価値から照射される光によって統御されなければなりません。

廣池の死後半世紀の間に多くのことが起こりました。日本においてさえ、廣池の心にあったモデルに国家を建設することは、現在では困難でしょう。モラロジー研究所はまことに適切にも、現代世界の現実にモラロジーの体系

を適応させる方向と未来の世界への展望の方向に動いてきました。しかし廣池の教説の中には、特に政治の分野において採用して役に立つと思われるものがたくさんあります。必要とされるのは、正に態度の変化です。この問題はちょっとの間おいておきまして、最高道徳が産業界においていかに役立っているか考えてみましょう。私の理解するところでは、多くの日本企業において、現実にうまく作用しているのです。モラロジーの方針で経営している企業は、多くの点で協調性のある事業と看做されています。最初の強調点は、製品の優秀性です。製品は良心的に製造され、適正な価格で販売されなければなりません。従業員は道徳教育を授けられ、若干の工場では、会社の歌が歌われる一種の祈禱会をもって仕事が始まります。労働者は自分の製造するものに対して個人的な責任感をもたされます。自分の担当の機械類に何かまずいことがおこると、自分でその欠陥を直そうと試みます。自分の分担範囲であるとかないとかいう議論にはわずらわされないのです。その結果、監督するスタッフは余り必要でなくなり、たいへん経費が節減されますし、また生産工程がスピード・アップされるわけです。適正な賃金を導入された資本に対する適正な収益に加えて、利潤は雇用者と労働者の間で分配されます。そこで彼らは企業の繁栄と個人的な利害関係を持つことになります。日本が大きな商業的成功をおさめたのは一部この制度のおかげであると思われます。

家の伝統が重要であるのにもかかわらず、個人的行状あるいは性行動については廣池は殆んど言及していません。家が継持されていることが第一に重要であると看做されています。離婚、それを廣池は大変な不幸と看做していますが、この点については非常にすこししか述べていません。性的不品行について一、二のさらっとした非難がありますが、結婚は安定するだろうと決めてかかっています。廣池は、花をむやみに摘む人を非難しています。このことから見て廣池には生態論的な考え方がいくらかあったと思います。一見すると、廣池は慈善的な施しに反対のように思われます。読みすすんでいってはじめて、貧困、病患、その他の重要な社会的目的の救援のために与える

ことは、当り前のことと廣池が考えていたことがわかります。廣池が反対しているものは、自分で自分の面倒がみれる人に対する援助で、そういう人々にとって、貰ういわれのない贈与は不健全な依頼心をつくるだけといっています。他の点では、突然大きな物音をたてて、眠っている人をおこすこととか、列車の中で自分勝手に窓を開けることなどのような、行儀のこまごまとしたことを主として扱っています。

V

廣池の思想を西欧に、特にこの国イギリスに適用した場合の重要性について、今しばらくの間、考えてみましょう。

伝統（オーソリノン）の教説は、現在イギリスで大変閑却されている非常に重要な真理を含んでいるように思われます。権威をもった系列に対する忠誠は、共同体の安定とその秩序だった発展にとって本質的に大切なものです。過去において最善であるものに対して正当な尊重をしないかぎり、未来のために計画は立てられません。そこで、とりわけ王位（the Crown）の立場を支援することは不可欠です。ほとんど同じくらい重要なことは憲法の護持で、それについては上院が重要な役割を有しています。伝統（オーソリノン）は革命（revolution）というよりはむしろ進化（evolution）を示しています。孔子が述べていますように、尊敬は隷従を含意するものではありません。「自分の忠誠を捧げる対象に忠言をさしひかえるような人が、どうして真に忠実であるといえようか」と孔子は云っています。慈悲心をもってする批判は、教訓の1つです。そこで服従はいつも慈悲心をもってする批判を配慮することによって和らげられなければなりません。社会は相互に尊敬し合う精神がたくさんないと、まとまっていかないものです。そして伝統（オーソリノン）の領域であきらかに最も必要とされるものです。そしてそれよりより低い程度で準伝統の領域でも必要とされます。権利の前に義務を置くこと、〔義務先行〕は最近まったく無視されているものです。もし権利にかけている強調をもう一方〔義務〕の方へ移してしまえば、多くの不安は回避されるでしょう。何故ならば権利と義務は相関し

ており、これはコインのどの面が上にくるかという問題です。最高道徳は、無限に連なる子孫に繁栄をもたらすという廣池の教説の有効性を、疑問に思う人がいるかも知れません。廣池がこの根拠としたのは、日本の皇室の永続性、天照大神の随従者に由来するといわれている日本の貴族のいくつかが永続していること、ある神官の家系、孔子の子孫、孔子の主要な門人のうちの３人と、孟子の子孫、これらはそれぞれの創建者の時代から2000年以上たった今なお中国で繁栄していることを廣池は発見しましたが、そういうことに基づいています。しかしそれは殆んど科学的証明とはいえないでしょう。西洋でこれに類するものを見つけることはむづかしいでしょう。というのは特に西洋の主要な聖人は大抵、独身の僧侶で子孫を残していないからです。イギリスの王室の一先祖であるアルフレッド大王は、私の思いつく聖人の資格があるように思われ、しかも子孫が現存している唯一のものです。しかしもし人がこのことをできるかぎり小さく見積ってみても、道徳的生活を送る人の方が、不道徳な生活をする人々よりも、平均して、幸福と繁栄を確実なものにするように、道徳的因果律が働いている、といっても、余り間違いではないでしょう。ヒットラーやイディ・アミンのような人物は、その行為が自らの破滅をまねくところの道徳的変質者の実例と考えることができます。明らかに、ことはいつも道徳的因果律通りには働きません。邪悪なるものが緑の月桂樹のように栄えるかも知れません。しかし、おそかれ早かれ、復讐の女神ネメシスが一撃を加えることでしょう。個人の生命が永遠であることを人が受け入れるなら、道徳的因果律は、私たちの一人一人に数学的な正確さで作用しているといえましょう。

Ⅵ

私の本〔「王位と伝統（オーソリノン）の教説」（仮題）――目下出版準備中〕の中で、私は廣池の唱える諸原理を西欧と、廣池没後の新しい時代に適合するように試みていますが、伝統（オーソリノン）の教説を出現しつつある社会的形態に適用することを考察しています。独立した国民国家が廣池の原理に従って、お互いに調和

的に競争するという時代は終りつつあります。新しい統合する力が、国民国家よりもっと広い組織体を産み出しつつあります。しかし伝統をもたないで、新しい団体は自らを確立することができるでしょうか。たとえばヨーロッパ経済共同体（ＥＥＣ）は団結と永続性を与える伝統を持たずして、はたしていつかはおこる破局を避けうるでしょうか。現在のところ、忠誠の焦点を提供するような像をそれは持ち合わせていません。同じことが国連についてもいえます。他方、英連邦は女王を伝統として持っており、未来のあるべき社会形態になりうる、といってよいでしょう。何故ならばそれは権力や法律に基づいているのではなく、共通の見解と相互の納得に基づいているからです。しかし政治的発展は唯一のものではありません。もし世界が安定を達成しえたならば、経済的構造に大きな変化がおこるに違いありません。狩猟と採集の生活から農業と通商、それと同時に自然におこりました戦争、に基づいた生活へ人類を転換させたと同じほど重要な転機に私たちは今立っています。新石器時代は、今なお本質的な面ではつづいています。しかし今や人類の文明は現代人の心になお存在する新石器時代的性情にとって成長しすぎていますから、新石器時代的性情の束縛から解放されなければなりません。共産主義と社会主義は試みてみましたが、欠陥があることがわかりました。ともかくも、金と競争に基づいた生活の仕方は、もっと合理的で、もっと無駄のないものにとってかわらなければなりません。そうして、今や解放されたおびただしい潜在力が形を成すようにしなければなりません。

このようなことを申し上げて、私はモラロジー研究所の見解から逸脱しているのではないかと非常に意識しています。同研究所は未来に焦点を当てた恐るべき知的勢力を擁しています。私の日本における文通者である川窪啓資は次のように手紙で書いてきました。すなわち、「研究所は明日の世界における普遍的な原理を提供できるような、新しいモラロジーの建設のために苦闘しています」と。モラロジーは受け入れられた教説の静的な組織体ではなく、進化の過程のいかなる段階の状況にも適用できる一連の原理なのです。モラロジーの指導者が、過去よりも未来に向って方向づけられていることは

明らかです。私はこの講演の最初の原稿を日本にあるモラロジー研究所に送って批判とコメントを求めたのですが、彼らが古色蒼然たる東洋哲学だけに関心を持っているんだという印象を私が皆様に与えはすまいかと、あきらかに気づかっていました。事実はその逆が本当なのです。しかしこの「古色蒼然たる東洋哲学」は正しいかも知れず、それに向って進歩した科学思想が回帰しつつあるかも知れない、と私には思えるのです。ほんの先週末、ロンドン大学、バース大学の物理学教授たちの出席している会議に私は参加していました。彼らは練金術の "unus mundus"（1つの世界）を是認する発言をしていましたが、これは正に私が前に述べようとしたところの古代中国の天地相関説のように見えます。科学は完全に一回転して人類の原初の事物の性質に対する洞察の1つに回帰しつつあるようです。そこで最も古色蒼然としたものが、実は最もモダンなものになるのです。

ともあれ、モラロジアンは現代の科学思想と完全に歩武をそろえ、それを彼らの体系の中に組み入れています。モラロジアンたちは、そうすることは彼らの見解では、永遠のものであるこれらの道徳原理と何ら抵触するものはないと思っています。今や東雲（しのめ）が明けそめはじめた新時代の模様を、何人もまだ詳細に描くことはできません。しかし未来に何が横たわっておろうとも（いやしくも私たちが生き残っているかぎり）、それはなお最高道徳の真理によって治められなければならないものです。

（モラロジー研究所研究員　川窪啓資　訳）

訳　注

1. 1824年創設されたロンドンの有名なクラブで、会員には有名な文学者や学者が多い。文明史家アーノルド・J・トインビーもそうであった。先般なくなられたモラロジー研究所顧問ジョーゼフ・A・ラワリーズ博士もその一人で、この講演に参列された。ボール氏ももちろんこのクラブの会員である。
2. ボール氏から訳者にあてた私信によると、アシニアムクラブの中の1つの小グループで以下の13名のうち10人が当日出席したとのことである。彼らはラワリーズ博士をはじめ、天文学者兼数学者、上院の世襲的議員でかつ科学者でもある人で元

大学名誉総長、ギリシャ古典に通暁している元高等文官、神学者、数理物理学者で音楽家でもある人、元外交官、化学史に特にくわしい化学者、生物学者（この人は稀れにしか出席しない）、工学にくわしい実業家、ロンドン国立美術館の科学部門の長で儒教、仏教等の東洋学にもくわしい人、弁護士、及びボール氏で、「イギリス社会の学識ある人士の精髄」をなす人々がその日の聴衆であった。これがおそらくイギリスにおける最初の正式の、講演と名のつく、モラロジー講演ではあるまいか。
3. ボール氏には現在までに刊行されている英文によるモラロジーに関する文献はほとんど送ってあり、またボール氏はここで言及されている『道徳科学の論文』の英訳草稿の一部（タイプコピー数百ページ）を熟読されている。
4. 檀君のこと。
5. これは従来の定義から多少変容している。これに限らず、モラロジーの国際化を進めていこうとすると、多少の変容が生じてくる。いかなる変容が許容可能で、望ましい発展として考えられ、またその逆であるか、今後の課題である。

MORALOGY

ADDRESS TO THE GROUP AT THE ATHENAEUM

ON 17 MARCH 1981

Robert E. Ball
Former Chief Master of the Supreme Court
of Judicature (Chancery Division)

In venturing to talk to such a body as this on the subject of moralogy I am conscious of great inadequacy. For you are predominantly scientists and academics, I am dealing with what calls itself a science and I have no pretensions to scientific qualifications and my particular expertise is in a narrow legal field far removed from the subject. Moreover the talk should really have been given by our friend Lauwerys, who is far more expert than I am and I am in a sense poaching on his preserves. However, Lauwerys himself and the Group itself are responsible, for as a result of the talk I gave here in December 1979 Lauwerys interested me in the subject, persuaded me to write a book about it, supplied or arranged for the supply of much material so far unpublished in the West and introduced me to the exponents of the science in Japan. So for the last year and more it is a subject with which I have been living.

Moralogy purports to be the science of morals, based on the Confucian outlook on the world as seen from Japan. Before giving an outline of its teaching I must explain how it arose. The founder was a Japanese, Chikurō Hiroike, who lived between 1866 and 1938 and was one of those

who brought Japan out of the mediaeval life of the Shogunate into the modern world. He started life as a schoolmaster, specializing in Chinese and Japanese Classics and Japanese history, but before long became a professional historian, not a very remunerative employment. His next step was to become part editor of an official encyclopaedia dealing mainly with literary, legal, political, medical and religious subjects, on which he worked for twelve years. This led to an interest in Chinese law and he became a professor of law at a Japanese college, lecturing on Chinese law and, rather oddly to foreign eyes, the history of the Shrines of Isë, a focal point of the Shintō religion. He attained a doctorate of laws at Tokyo University in 1912, his thesis being on Ancient Kinship Laws in China. This coincided with a very severe illness which was accompanied by a kind of religious conversion, by reason of which he gave up his academic career and devoted himself to the development of learning and the protection of truth. He became a member of a Shinto Sect but before long was thrown out because of reforms which he sought unsuccessfully to introduce. In circumstances of severe difficulty, he then wrote an enormous work of 3,341 pages, entitled *A Treatise on Moral Science: A First Attempt at Establishing Moralogy as a New Science*. This was published in 1928 and led to the formation of an educational foundation, consisting of a research institute and, shortly afterwards, a college. This developed until Hiroike's death in 1938. It was carried on by his eldest son but was nearly obliterated by Japan's entry into the Second World War, for its teachings were anti-imperialist and it disapproved of Japan's military ventures. It revived at the end of the war and has since gone from strength to strength. It is now under the presidency of Chikurō's grandson, Sentarō Hiroike, and runs the research institute, a university and two schools. It has some 600 local and branch offices and centres in South Korea, Brazil, Honolulu and California. It has some 60,000 individual members and over 6,000 corporate members, many of them

large industrial concerns which have adopted the principles of moralogy with success and consequently provide very adequate financial support. Lauwerys tells me that they command a quarter of a million votes at elections.

So what is moralogy all about? In the presence of a gathering such as this I would not dare to claim that it is a strict science of the kind of which most of you are experts. Its claim to be a science is expressed as follows:—"Since supreme morality is pursuit after spiritual security and conviction on the firm basis of the law of causality, we may call it a scientific method of approach". It takes as its basis certain propositions formulated by sages who are regarded as divinely inspired and whose teachings are thus self-evident and beyond argument. From these it deduces rules for harmonious living which, it claims, will bring success in life not only to the practitioner but extending to his remote posterity. It says nothing about the life to come and is not a religion, though it has religious aspects. It is a kind of practical philosophy of life but does not deal with ultimate philosophical problems. Nor is it a political system, though it has political implications.

In order to understand it I think one has to go back to the mental outlook of ancient China, as exemplified and developed by Confucius, though it is far older than that philosopher. This thought was adopted in Japan and further developed there and it seems to underlie Hiroike's teachings, though he has broadened and modernized it by reference to the learning of the outside world, in particular that of the West and India.

Speaking as a novice, the ancient Chinese world picture appears to me to be this. In the beginning was God, whose reality and characteristics are

beyond all human understanding, but who can be partially apprehended as Benevolence or, as Christians would say, Love. God, beyond all categories, is the ultimate, the Unchanging. God created Heaven and Earth. By Heaven one means the supersensible world of the Spirit, which contains the laws of the Universe, both those governing the material creation, such as the laws of physics, and the spiritual or moral laws. The law of nature is thus regarded as the mind of God. By Earth one means the material universe, including Man, and all its functions, tendencies and characteristics. Heaven is the creative element and what happens there has a higher degree of reality than what happens on Earth. It is of an evolutionary character and directs the general flow of events, that is, the Way or the Ta'o, by the interplay of forces of movement or stability. The patterns of movement in Heaven have their reflections in events on Earth. It is like Plato's theory of the Cave, in which mankind can see only the shadows cast by the real events going on behind him. The two great forces are the positive and the negative, which are complementary and interact. The positive principle is the Yang, seen as creative, dynamic, masculine and light. The negative principle is the Yin, seen as generative, receptive, protective, feminine and dark.

By at any rate the 12th century B.C. the Chinese had systematized the heavenly forces as a theoretical family consisting of father and mother, three sons and three daughters but these are not to be understood as persons or gods and goddesses but as elementals or tendencies of evolutionary development, with images reflecting their characteristics. The four Yang elements, the father and three sons, are: Ch'ien, the creative, the strong, whose image is Heaven; Chên, the eldest son, the Arousing, exemplifying movement, life energy, whose image is Thunder; K'an, the Abysmal, exemplifying danger, the mysterious depths, the nearest approach to Evil, whose image is Water—perhaps one should say the

primordial ocean; and Kên, Keeping Still, exemplifying Rest, immobility, whose image is Mountain. The four Yin elements, the mother and three daughters, are: K'un, the Receptive and generative, devoted and yielding, whose image is Earth; Sun the eldest daughter, the Gentle, the penetrating and insidious, whose images are wind and wood; Li, the Clinging, the Light-Giving, the Intellect, whose image is Fire, and Tui, the Joyous, whose image is Lake. All in course of time have been given secondary attributes, such as guardianship of points of the compass and seasons of the year. For example, Tui, Joy, is also sexual and dangerous, is connected with the mouth and tongue, therefore speech and intuitive perception, and with metal, hence weapons and warfare, rules the West and autumn and so is connected with death and the afterlife. Her equivalent among Greek divinities, though she is not a divinity but a tendency, would be a sort of compendium of Aphrodite, Athene and Persephone, though Athene's main counterpart would be the second daughter, Li, who typifies learning and the reasoning intellect. The interplay of these heavenly tendencies results in all the events on Earth but they do not amount to anything fatalistic, for conduct on Earth may be adjusted so as to modify their application. Everything is in a constant state of flux and the positive advance is always met by the negative reaction and vice versa but the result is not the static circularity of Hinduism but a progress to an unknown goal.

In the background is always the Benevolent God Himself, who is a living personality and may be addressed directly in prayer and so can operate on the tendencies from above, just as we may adapt ourselves to them from below. Moreover, God can become incarnate in Man. His incarnations are equated with the transcendent divinity whereas the ultimate God is thought of as the immanent element in all His creation.

But we must not forget the Japanese factor in Hiroike's basic thought. He was brought up as a Buddhist but in Japan, I understand, there is a close connection between Buddhism and Shintoism and he was greatly influenced by the latter. A leading characteristic of this is veneration of the ancestors and in particular the ancestors of the Japanese Royal Family. The line is supposed to have commenced with the goddess Amaterasu Ōmikami, identified in mythology as a Sun Goddess. I have not so far been able to ascertain whether Hiroike considered her to be a historical person to whom divine attributes have been ascribed but think this likely. It seems to me that in Japanese eyes it does not really matter. According to the Shinto faith she was of such supremely virtuous character that she has conferred virtue and continuity on the whole line of her descendants and the Japanese emperor is regarded as something more than human. The Shrines of Isë, of which Hiroike had a profound knowledge, are the centre of the cult of the imperial family. This cult has an immense influence on his work.

I would not like you to think, however, that moralogy is an exposition of this system. I have gone into it in some detail because it seems to underlie much of Hiroike's basic outlook, in particular his ideas of the Divine, and one cannot formulate any system of moral values without some image of the ultimate.

So the framework of Hiroike's thought is the very stable one of classical Sino-Japanese culture. There is no wild adventure of ideas, no questioning of ultimates, for the pattern of creation has been ascertained and all that remains is to put oneself into harmony with the evolutionary flow. Scientific discoveries are fitted into this framework without difficulty and it is indeed curious that the present conclusions of the atomic physicists seem to have been anticipated in China by several thousand

years. The object of Hiroike's work is to lay down the principles of conduct by observance of which human happiness may be secured. The method is scientific in the sense that it is claimed that morally good actions will automatically produce material benefits as cause and effect. We may doubt the validity of this proposition but let us look at the system before criticizing it.

Hiroike starts with the idea of what he calls supreme morality. This he gathers from the teachings of the world's great sages, who have all been inspired by God and given an insight into the heaven of governing tendencies, as described above. He makes a sharp distinction between supreme morality, which is altruistic, and all previous systems of morality, which he calls traditional or conventional morality. These are all contaminated to some extent by selfishness and represent the compromises which the selfish man has to make in order to live at peace with his fellows. So codes of chivalry like Bushidō, the code of the Japanese warrior class in mediaeval times, are condemned. In the *Treatise* there are sections dealing with some twenty-four kinds of defective morality. These sections have not yet been translated out of Japanese and I have seen only the Index. Examples are:—Morality of Justice, Duty-Bound Morality, Self-Respecting Morality, Ceremonial Morality and Morality of Social Intercourse, Morality of Compromise and Morality of Mental Culture.

The supreme morality of the Great Sages, however, is said to be on a higher level. The sages Hiroike picks out are five. About four there is little difficulty. They are Jesus Christ, Confucius, the original Buddha Sakyamuni and Socrates.As we know the latter's doctrines only through the writings of Plato, it might be claimed that Socrates/Plato is a composite Sage. The fifth is the Imperial Ancestress, Amaterasu Ōmikami,

and here a non-Japanese finds some difficulty as to her actual or mythical reality and in any case, though she was said to observe the principles of supreme morality, there appears to be no oral or written record of her actual teachings. In South Korea, I understand, they have substituted a local sage for her. In fact, anyone who practised supreme morality, which is said to be an attainment of the greatest difficulty, qualifies as a sage, but Hiroike confines himself to the five I have mentioned. He expressly rejects Mahomet. One could think of other possible candidates, such as Moses and the Pharaoh Akhnaton. By ignoring theology and concentrating on the moral teachings of the sages Hiroike finds a consistant body of doctrine, all in essence reducible to the Christian formulation of "Love God first and your neighbour as yourself", but set out a little more fully in six principles.

These are:—

1. The renunciation of self. This is not a call to asceticism of abandonment of temporal prosperity but a prohibition against doing anything from egotistical motives.
2. Belief in the benevolence of God as seen in His creation of the laws of the universe. God is good and so are His works.
3. The precedence of duties over rights. No rights accrue to a man who does not discharge his duties first.
4. Human enlightenment and salvation. This has no esoteric or mystical meaning but is merely the principle that personal happiness is achieved by providing security, peace and happiness to as many other people as possible. To be of any use, morality must be practised by conduct spreading it to others.
5. Acceptance of moral causality; that is, that actions have material results according to the morality or lack of morality with which they are performed. It is something like the Hindu and Buddhist doctrine

of Karma but worked out in the course of the lives of the practitioner and his descendants rather than in a succession of life courses of the practitioner himself. Hiroike reinforces this in a most interesting way by reference to the Darwinian theory of evolution—the higher the morality the greater the survival value in the struggle for existence. Adherence to supreme morality results in the happiness both of the individual and of his descendants and promotes the welfare of mankind.
6. Finally, the ortholinon. This is the most difficult to explain and I shall have to spend a little time on it.

Ortholinon, of course, is Greek for straight thread. Essentially the doctrine is that one must accord loyalty and respect to the lines of descent of one's benefactors; not so much to individuals representing the lines of descent for the time being but rather to the lines themselves in the abstract. Put in another way, it could be said to be loyalty to the evolutionary stream in the form of its lines of authority affecting the individual, and so helping to work out the good moral causality initiated by the virtuous predecessors into the harmonious development of the future. This may become a little clearer when we discuss the various kinds of ortholinon. There are three major ortholinons and an indefinite number of quasi-ortholinons.

The major ortholinons are as under:—

1. The national ortholinon. This is the State, as represented by its line of headship, the king, queen or emperor in a monarchic State or its president for the time being in the case of republic. The king or president is the spiritual embodiment of the State. But the theory works better for a monarchy than for a republic. Hiroike lays special stress on the Japanese monarchy with its unbroken descent from mythological past but he has a particular regard for the British monarchy also. He sees

these lines as the essential threads, without which the State would fall apart.

2. The spiritual ortholinon, also called the ortholinon of teaching. This is a kind of double line, for the five sages and the series of their successors in their teachings are one line and another, optional, line for those who have faith in a particular religion is that of the founder (who may not necessarily be one of the sages) and the series of his successors who have inherited his doctrine and who are not necessarily ordinary religious leaders or teachers. Hiroike holds strongly that adherence to a specific religion is inessential. In his view the organized religions have no monopoly of God and are apt to be infected by professionalism, which obscures the original light of inspiration. Everyone must believe in God and respect his ortholinons—indeed Hiroike says flatly that those who do not do so are subhuman, for belief in God is what distinguishes us from the animals. All should worship God twice daily in their own way, pray to Him, ask for forgiveness of sins and study the teachings of the sages, preferably in the original, and, of course, his own works, but do not need to rely on priestly intervention, though membership of a religious organization is not discouraged. However, Hiroike has a somewhat anti-clerical bias, arising, no doubt, from his unfortunate experiences with the Shinto sect to which he belonged for a time.
3. The family ortholinon. This is the line of our ancestors culminating in our parents. From these we derive our physical characteristics, our initiation into the ways of life, much of our culture, possibly a great part of our material prosperity and our sense of belonging. To be cut off from one's family is a very real deprivation. The line projects through ourselves and is thus evolutionary in nature. We must respect the past if we are to influence the future for the good. Moreover the family is the nucleus of the state and so connected with the national

ortholinon.

Less important but still significant are the quasi-ortholinons, who may be described as the benefactors who have rendered us practical assistance of any kind. Such are senior members of the family outside the direct line (elder brothers for example), teachers and technical instructors and superiors such as high government officials, military officers, leading business executives, local administrators, factory owners and heads of firms but this is not a comprehensive list. The principle is loyalty and respect in return for favours conferred. But the respect can hardly be absolute and unqualified. Perhaps wrongly, I have suggested a gloss on this by saying that quasi-ortholinons are entitled to quasi-respect. It is difficult to accept in full the Japanese respect for authority but we can at least recognize that right conduct towards us is entitled to a return in the form of loyalty. The "them and us" attitude towards employers, for example, needs to be replaced by bonds of mutual recognition and collaboration.

Such are the main principles of supreme morality. The practice of such morality may be summarized as the exercise of benevolence in five forms:—

1. Benevolent justice; that is, intellectual calculation as to the timing and quality of benevolence.
2. Benevolent self-sacrifice which helps others. Excessive or compulsive self-sacrifice in the form of asceticism is not recommended.
3. Benevolent expiation of others' faults. Such faults should not be the subject of exposure or complaint but should be compensated for by one's own efforts.
4. Benevolent self-perfection of character. Tranquillity of mind is attained by disinterested perfection of one's own character, leading ultimately to the enhancement of the well-being of the race.

5. Benevolent Criticism and Self-Examination. This comprises criticism of oneself and, when necessary, others but where others are concerned self-assertive egoism is to be excluded. The criticism must be given with benevolence of spirit.

Hiroike recognizes that the detailed application of these precepts must inevitably vary from age to age and from country to country. The rules of morality and consequently the application of the law of moral causality evolve like everything else. One could say that increasing awareness and insight, combined with increasing complexity, inevitably produce new moral problems.

Though Hiroike's learning was universal he was very much a man of his own time and place and he has attitudes which are hard to accept at first sight. He is not at all egalitarian. He considers a large part of mankind to be incapable of understanding supreme morality, which is a system for the Confucian gentleman or superior person. Anyone can aspire to that status but the majority do not. For him, the class structure is divinely appointed and results from the varying destinies of mankind, the result of pre-natal and post-natal influences, but he accepts mobility between classes. Progress is the result of the work of individuals of outstanding intellect. He says: "No great achievement has ever been accomplished through the agency of public opinion or by the combined powers of mediocrity". Old age, wealth and high rank are all regarded as marks of presumptive virtue, though the presumption is not absolute. Those at the top may be living on virtue stored up by their ancestors, which they are in course of squandering, so they may themselves be worthless and on the way to disaster. Nevertheless his world picture is fundamentally aristocratic and he scorns egalitarianism as a kind of Utopian mistake. He lists current evils as democratism, socialism, sentimentalism,

maternalism (indicating the spoiling of children or inferiors by unwise indulgence), opportunism and materialism.

His ideal society is a State headed by an emperor who is himself a sage, supported by a virtuous aristocracy and benevolent employers, whose efforts are accepted by an obedient and respectful working class. Nevertheless it is necessary for a man in a high position to respect and obey the general will of his inferiors, so there is room for a limited kind of democracy, which he calls "aristo-democracy". Consequently, in politics, there must be a balance between the insights of the enlightened superiors and the will of the masses. This leads to the kind of constitution which we have at present, though with greater influence for the aristocratic element. This seems to be close to what Aristotle calls "polity", in which rule is exercised by the bulk of the citizens for the benefit of the community as a whole, as opposed to demagoguery or democratism, otherwise rule for the benefit of the men without means or a mere voting majority.

In family life the wife is obedient to the husband, though husband and wife must respect one another's personalities. Children must respect and obey their parents and juniors should respect their seniors, such as elder brothers. In business life, obedience and respect must be accorded to seniors, who are under a reciprocal duty to listen to and obey the general wishes of the inferiors. The educational system needs to be revised by putting the inculcation of morality into first place. Though factual learning is essential it must be governed by the light thrown by spiritual values.

Much has happened in the half century since Hiroike's death and it would be difficult now to construct a State, even in Japan, on the model he has in mind. The Institute seems to have moved on, very rightly, to

the adaptation of the system to the realities of the modern world and to the prospects for the world of the future. But there is a great deal in Hiroike's teachings which may usefully be adopted, particularly in the political field. It is really a change of attitude which is needed. Let us leave this for a moment to consider how supreme morality works in the industrial context, as I understand, it actually does in many Japanese businesses.

A business run on the lines of moralogy is regarded as in many respects a co-operative venture. The first stress is on the excellence of the products, which must be honestly made and sold at fair prices. The employees are given instruction in morality and in some plants work commences with a sort of prayer meeting at which the firm's anthem is sung. The worker is given a sense of personal responsibility for what he produces. If anything goes wrong with his machinery he tries to remedy the defect himself, unhampered by demarcation disputes. The result is much economy in supervisory staff, who are not much needed, and a speeding up of the processes of production. Profits, over and above fair wages and a fair return on the capital introduced, are shared between the employer and the workers, who thus have a personal stake in the prosperity of the business. This system is, it seems, partly responsible for Japan's great commercial success.

In spite of the importance of the family ortholinon Hiroike has little to say about personal or sexual behaviour. It is regarded as of the first importance that the family be maintained and he says very little about such subjects as divorce, which he regards as a disaster. There are one or two passing condemnations of sexual irregularity but he assumes that a marriage will be stable. He condemns people who pick flowers only to throw them away, so he has something of an ecological outlook. At first

sight he seems to be against charitable giving; it is only by reading further that one discovers that he takes for granted giving for the relief of poverty and sickness and other essential social purposes. What he is against is giving to people who are capable of looking after themselves and for whom undeserved gifts would only create an unhealthy dependence. Otherwise he seems to deal mainly with the minutiae of manners, such as waking people up by sudden loud noises or opening windows on trains.

Let us now consider for a moment the importance of Hiroike's thought in its application to the West and to this country in particular.

The ortholinon doctrine seems to contain very important truths which are at present much neglected here. Loyalty to the lines of authority is essential to the stability of the community and its orderly development. We cannot plan for the future without due regard for what is best in the past. So it is above all vital to uphold the position of the Crown. Almost as important is the maintenance of the constitution, in which the House of Lords has an essential part to play. The ortholinon indicates evolution rather than revolution. As Confucius indicates, respect does not imply servility; he says: "How can he be said to be truly loyal who refrains from admonishing the object of his loyalty?" Benevolent criticism is one of the precepts, so obedience must always be tempered by regard for first principles. Society will not hold together without a large measure of mutual respect and it is clearly most needed in the area of the ortholinons and, to a lesser degree, that of the quasi-ortholinons. The putting of duties before rights is something much neglected nowadays; much unrest might be avoided if the emphasis on rights were turned the other way round, for rights and duties are interrelated and it is a question of which face of the coin is uppermost. One may question the validity of Hiroike's doctrine that supreme morality produces prosperity in an endless chain

of descendants. He bases this on the continuity of the Japanese imperial line, that of some of the noble families of Japan said to be descended from the followers of Amaterasu Ōmikami, certain priestly Shinto families and the descendants of Confucius, three of his chief disciples and Mencius, whom he discovered still prospering in China over two thousand years after the days of their respective originators, but that is hardly scientific proof. It would be hard to find any parallels in the West, particularly as our leading sages were mostly celibate priests who left no issue. King Alfred, an ancestor of our own royal family, is the only one I can think of who might qualify as a sage and still has living progeny. But if one minimizes that, it is probably true to say that moral causality operates, on average, to secure happiness and prosperity for those who lead moral lives rather than for those who lead immoral lives. Figures such as Hitler and Idi Amin could be taken as examples of the morally perverted whose deeds bring destruction to them. Obviously it does not always work that way—the wicked may flourish as the green bay tree but Nemesis may strike sooner or later. If one accepts that the life of the individual is eternal, moral causality should operate for each one of us with mathematical accuracy.

In my book, in which I try to adapt Hiroike's principles to the West and to the new age which has started since his day, I consider the application of the doctrine of ortholinon to the emerging social pattern. The days of independent national States competing harmoniously with one another according to Hiroike's principles, are passing. New integrative forces are producing organizations much wider than the national State. But can the new bodies establish themselves unless they acquire ortholinons? Can the European Economic Community, for instance, avoid eventual failure unless it acquires an ortholinon to provide cohesion and continuity? At present it has no image to provide a focus of loyalty. The

same with the United Nations. On the other hand the British Commonwealth of Nations, which has an ortholinon in the Queen, could well be the pattern of the future because it is not based on force or law but on a common outlook and mutual persuasion. But political developments are not the only ones. It is obvious that there must be vast changes in the economic structure if the world is to achieve stability. We are at a turning point as important as that which took mankind from a life of hunting and gathering to one based on agriculture and trade with warfare as a natural concomitant. The Neolithic Age has continued in essentials until our own lifetimes but mankind has now outgrown it and must be freed from its bonds. Communism and Socialism have been tried and found wanting. Somehow the way of life based on money and competition must be replaced by something more rational and less wasteful so that the enormous potentialities now open may be realized.

In saying this I am very conscious that I may be deviating from the views of the Institute, which contains a formidable intellectual force focussed on the future. My correspondent in Japan, Professor Kawakubo, writes: "We are now struggling to build *a new* moralogy which can present universal principles in the world of tomorrow". Moralogy is not a static body of received doctrine but a set of principles which can be applied to the situation existing at any stage of the evolutionary process and it is obvious that its exponents are oriented to the future rather than to the past. I sent my first version of this address to the Institute in Japan for criticism and comment and they are clearly worried lest I give the impression that they are concerned merely with a very old-fashioned kind of oriental philosophy. In fact, the reverse is true. But it seems to me that this "very old-fashioned kind of oriental philosophy" may be just that to which advanced scientific thought may be getting back. Only last week-end I was at a conference attended by professors of

physics from the universities of London and Bath and they were talking with approval about the alchemical "unus mundus" which appears to be precisely the ancient Chinese doctrine of the inter-relationship of Heaven and Earth which I have attempted to describe above. Science may be coming to a full circle in returning to one of mankind's original insights into the nature of things, so the most old-fashioned may in fact be the most modern.

Be that as it may, the moralogians keep fully abreast of modern scientific thought and incorporate it into their system. They find nothing in it to conflict with those moral principles which are, in their view, eternal. Nobody can yet draw in any detail the pattern of the Age now dawning but whatever may lie in the future (if we are to survive at all) must still be governed by the truths of supreme morality.